

指方立相の義ここにきわまるというべきである。

かくして指方立相の論はわれわれが出離之縁あることなき身と信知せられ、それゆえに仏は法界身として特にわれら流転の身のための仏としてうなずかれるならば、おのずからに解かれてゆく問題であるというほかはない。要は「無有出離之縁」のわが身と信^{あき}らかに知ること一つにかかるといわなければならない。善導が指方立相論を

立論するに当って「末代罪濁の凡夫」の自覚を強調し、このものを特に空にあって舎を建てる能力なき「術通なき人」に喩え頭わした所以はここにある。われわれは上述した道緯や曇鸞など、およそ指向西方の教義がみずからに問われた浄土の先覚に、一貫した根本姿勢が常にここにあった事実を、いま改めてかえりみるべきである。

曇鸞法師の如きは、康存の日常に浄土を修す。亦毎に世俗の君子有りて、来りて法師を呵していわく、十方仏国皆な浄土たり、法師何ぞ乃ち独り意を西に注むるや、豈に偏見の生にあらずやと。法師こたえていわく、吾、すでに凡夫にして智慧浅短なり。未だ地位に入らず、念力均しくすべけんや、草を置きて牛を引くに恆に心を槽塋につなぐべきがごとし、豈に縦放にして全く帰するところ無きことを得んやと。『安樂集』巻下)